

# 資料館だより

Vol. **36**

平成30年3月

**ここまで100年、ここから100年**  
飛行場がもたらしたもの  
各務ヶ原飛行場100周年記念事業

**川島の渡船場と昔の街道**  
川島歴史さんぽ

平成30年4月から  
中央図書館に移転

**各務原市歴史民俗資料館**

〒504-0911 岐阜県各務原市那加門前町3丁目1-3(各務原市中央図書館3階)

TEL 058(383)1361 URL <http://www.city.kakamigahara.lg.jp/rekisi/>

# ここから 百年

平成29年、各務ヶ原飛行場が太正6年(1917)に開設して100年を迎え、各務原市ではいくつかの記念事業を行いました。中央図書館で開催したパネル展では、100年の歩みを伝える写真や年表を展示し、多くの来場者を集めました。



年表を前に来場者とマスターが語り合う (パネル展)

## 基地に残る飛行場の歴史

記念事業では、航空自衛隊岐阜基地に残る各務ヶ原飛行場やキャンプ岐阜時代の史跡や記念碑をめぐる「岐阜基地探訪ツアー」も実施しました。通常の基地見学とは趣を変えて、米軍駐留時に設けられた基地内鉄道のプラットフォーム跡や、爆弾の破片で削られた跡や機銃の弾痕がある塀など、基地に残されてきた百年の歩みを今に伝えるスポットを巡りました。

進駐軍駐留時に、ランドリー工場として使われ、今も倉庫として使われている建物は、ツアー参加者が最も印象に残った場所のひとつとして挙げられています。50年前にこのランドリーで働いていたという参加者は、塗り直されたベンキの下に、今もつつすらと見ることのできるCAMPGIFULLAUNDRYの文字に、「当時ここで働いていた時の様子が目に浮かんできた」と当時を懐かしんでいました。



うっすらと残る文字



旧ランドリー工場 (岐阜基地探訪ツアー)

## 飛行場とともに

パネル展会場では、公募市民による「飛行場マスター」が、来場者へのガイドに活躍しました。退職後、自分の住んできたまちを見つめるため参加しました」と語るのはマスターの一人、宮脇實也さん。「来場者への解説をしながら、私自身も街の歩みを実感し、これからの街を考える機会になった」と、ガイドの活動を振り返ります。「事前研修で、飛行場が都市基盤や産業などに大きな影響を与えたことを学んだが、中でも川崎航空機(現川崎重工)の移転には驚かされた」。神戸から約1200人もに従業員とその家族が移り住んだ川崎航空機の移転では、転入者のための住宅地、学校、道路など整備され、今も街の骨格として存在しています。

「昭和40年代に転入してきた私だけでなく、若い世代の来場者にも、飛行場が現代の各務原市を形づくってきたことは驚きだったようだ」と宮脇さん。住宅や工場が立ち並び現在の鶴沼朝日町周辺は、広大な東飛行場の跡地であることは意外と知られていません。住宅地の中で異彩を放つ2車線の広い道路は、かつての東飛行場の名残を今に伝えています。「こうした街に残る歴史は、来場者からも教えられることがあった」と宮脇さんは言います。



東飛行場東端の外郭道路跡 (上図●)

## 1枚の写真からよみがえる記憶

同じくマスターとして活躍した三好圭弘さんも、「来場者との語り合いが、埋もれていた記憶を呼び覚ますこともあった」と話しました。フランス航空教育団の写真パネルを前に、当時の人々の歓迎ぶりを話したところ、70代の来場者が、自身の祖母の記憶を語り出したといいます。

「祖母は明治生まれだったが、なぜかフランス語で仏国歌が歌えた。軍の歓迎会で合唱したと聞いていたが、それがこのフランス航空教育団だと合点がいった。単なる解説ではなく、来場者一人一人との語り合いが記憶に残る歴史を引き出すこともありました。さらに、展示が伝える先人の思いが、若い世代に受け継がれていくこともありました。「空軍抵抗を減らすための特殊なリベットの勉強を、今ちよとやっているとるところです」と言うのは、会場を訪れた工業高校の生徒。展示されていた(飛燕にもそのリベットを見つけた彼は、「今に至るまで技術はつながっている。僕も何かの技術を残したい」と熱い思いを語ってくれました。



飛行場マスター 宮脇實也さん

飛行場マスター 三好圭弘さん

こうした記念事業に携わった私も、自分自身の思い出のそこかしこに、飛行場開設にはじまる街の移り変わりがあることを、あらためて実感しています。賑わいに胸をときめかせた那加駅前商店街、米兵を父にもつハーフの同級生、川崎航空機の社宅だった友人宅、そのどれもが「飛行場の街」に関係しています。

パネル展でのアンケートに「これからの100年は、各務原はどのように変わっていくのでしょうか」という、来場者の声が残されていました。それを考えるためにも、これまでの歩みを今一度確認し、考える材料として次の世代に伝えていくことが大切なのでしょう。(杉山一博)

## 関連書籍のご案内

- ◆ 記念事業のひとつとして、資料集「各務ヶ原飛行場100年史」(各務原市資料調査報告書第43号)を刊行しました。新たに米軍資料から見つかった昭和初期の各務ヶ原飛行場の姿や、基地に残る歴史の足跡などを掲載しています。
- ◆ 販売場所 歴史民俗資料館(中央図書館3F)・文化財課(市産業文化センター7F)・木曾川文化史料館(川島会館4F)・鶴沼宿町家館(鶴沼西町)・航空宇宙科学博物館
- ◆ 頒布価格 500円



# 飛行場がもたらしたもの

各務ヶ原飛行場は、都市としての各務原の発展に大きな影響を与えました。開設から1世紀を経た現在も、その影響は市内のあちこちに見ることが出来ます。

## 川崎航空機の移転に伴う人口増加と近代化

飛行場の設置により、周辺には軍の施設だけでなく、民間の航空機関連工場が進出してきました。大正10年以降川崎造船所は蘇原村三柿野に20万㎡以上の用地を取得し、神戸から運ばれた航空機の組み立てを行いました。航空機の需要に伴い、昭和12年、機体工場が各務原に移転拡充され、1200人もの従業員が神戸から移転することになりました。大阪毎日新聞は、「川崎本社ではこの職工大移動に備え総額約200万円を投じドイツ、ツェッペリン会社のドルフアーベンに匹敵するわが国最初ともいふべき大規模の工場文化村を建設する計画で目下着々工事が進められていく」と伝えています。

昭和12年から13年にかけて、現在の那加雄飛ヶ丘町や那加桶町などに、寮や社宅が建設されました。雄飛ヶ丘に建



出典：大阪毎日新聞(1937年6月11日)  
所蔵：神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫

てられた約600戸の住宅は「いずれも6坪余の前庭を備えた平屋木造建4間、ガス、水道、電気の施設もある瀟洒なもの(前掲大阪毎日新聞)でした。」

さらに公衆浴場や共済会購買所、病院※1、運動場※2などの環境も整えられ、現在の市街地の祖型になる街づくりがすすめられました。那加地区では、こうした人口急増を受けて、那加尋常小学校の分教場(現在の那加第二小学校)が設立されるほどでした。

※1現在の市産業文化センターの位置  
※2現在の那加中学校の位置

## ものづくりの基礎を築く

川崎航空機では、戦時の増産体制の下、県下から工員を募集して技術者の養成・人員拡充をはかるとともに、徴用工員や学徒動員も受け入れました。昭和19年4月には3万人を超える従業員を抱え、さらに多くの従業員用宿舎が工場周辺に作られました。飛行場周辺には三菱重工業、大垣鉄工所、各務原精機製作所などの工場も置かれ、各務原は航空産業の一大拠点となりました。

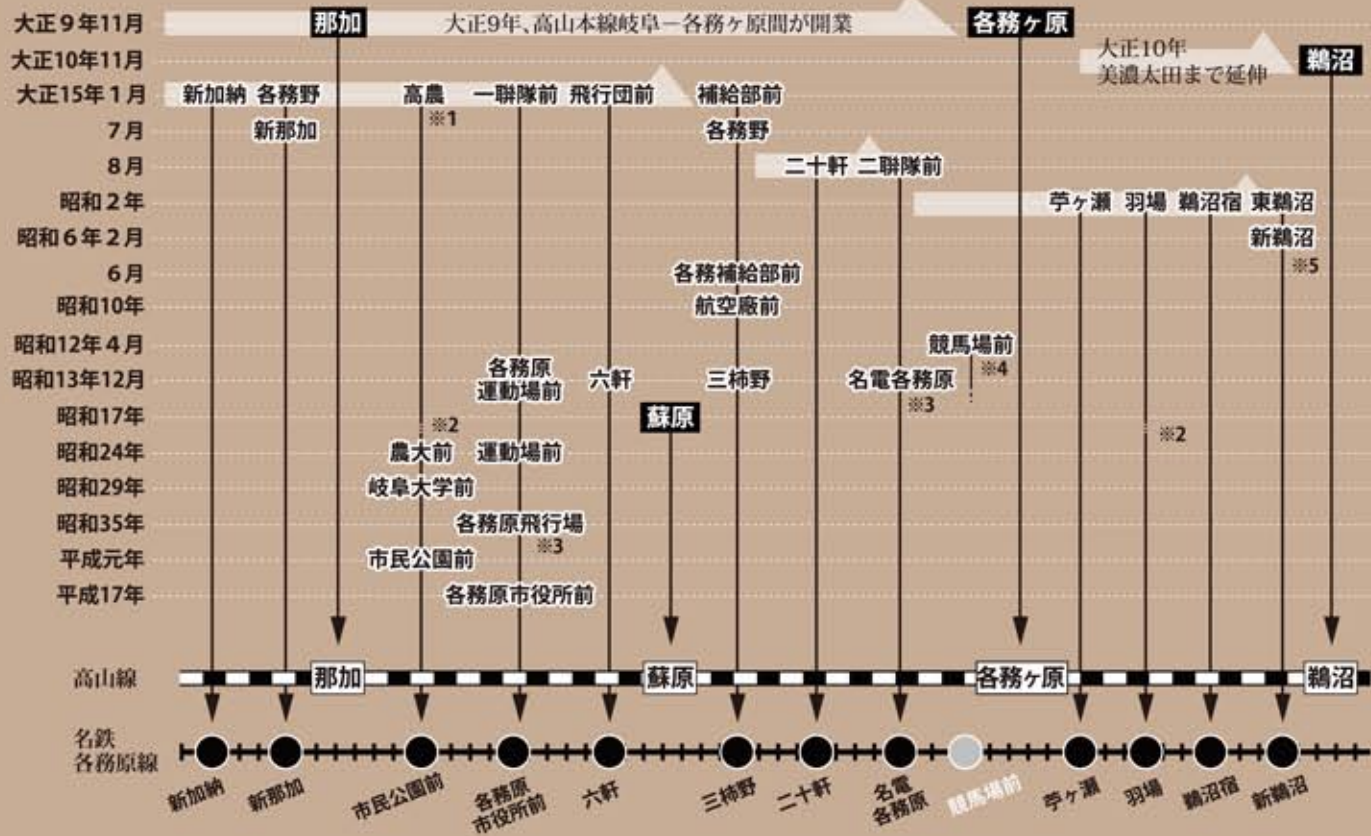
戦後、川崎航空機工業岐阜工場では従業員数の激減に加え、進駐軍から航空機の製造を禁止されたため、日用品や電気器具、バスボディ等民需品の製造を行いました。航空機の製造が再開すると、戦前に技術者教育を受けた工員たちが生産現場の中心となりました。各務原市は現在においても輸送用機械を中心に多様な分野の製造工場が集まっております。岐阜県内でも有数のものづくりの街となっています。

(引地歩)

## 参考文献

「川崎重工岐阜工場50年の歩み」昭和62年  
「鷺沼町百年史」昭和63年

## 市域の鉄道の変遷



大正9年(1920)、高山線の岐阜・各務ヶ原間がまず開通し、翌10年に各務ヶ原-美濃太田間が延伸となりました。現在の名鉄各務原線は、大正15年(1926)1月に安良田(岐阜)一補給部前(現三柿野)が各務原鉄道として開業し、同年8月には二十軒、二聯隊前(現名電各務原)まで延伸、昭和2年にはさらに東鷺沼まで延伸されました。こうした鉄道の整備は、各務ヶ原飛行場の存在と無縁ではなく、飛行場に開設された軍施設への輸送手段として重要な役割を果たしていました。

高山線は計画当初、岐阜駅を起点に関経由とする路線が有力でしたが、陸軍の意向が反映され、飛行場が所在する各務原経由の路線となりました。陸軍省から鉄道省に対する要望として、鉄道線路の通過を禁じたい地域、各務原北方通過、南方通過そ

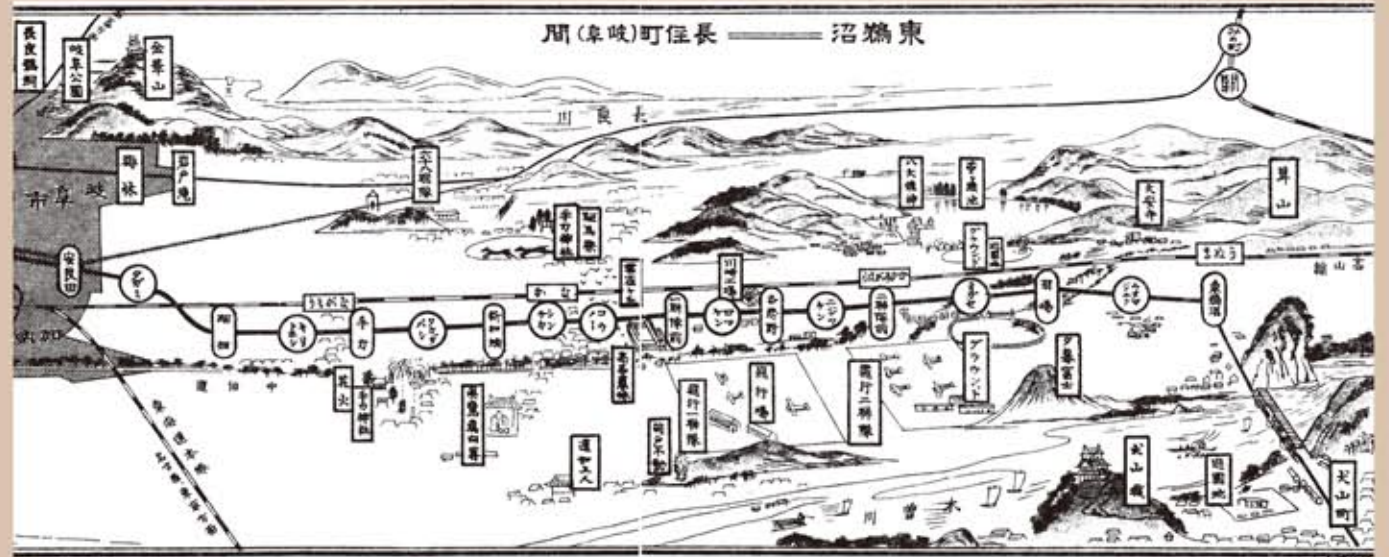
れぞれの場合の停車場希望位置を記した地図も提出されています。(JACAR ref.C03011617100「岐阜高山鉄道に関する件」(防衛省防衛研究所)) 昭和12年の川崎航空機社宅群の建設など、蘇原村では三柿野地区の工場群拡大による開発がすすみ、昭和17年には蘇原駅が設置されました。

各務原鉄道(現名鉄各務原線)では、一聯隊前・二聯隊前・飛行団前など、駅名から見ても、軍関係施設の最寄り駅であることがうかがえ、その後も各務補給部前・航空廠前と、時節にあわせて駅名の改称が行われています。また、高農・運動場前・競馬場前といった駅名からは、鉄道敷設により都市化、近代化が進む中で、様々な施設が整備されていったことがうかがえます。昭和4年の各務原鉄道の案内図(右ページ)には、芋ヶ瀬池や手力神社などの名所旧跡に加え、飛行場と飛行一聯隊、二聯隊といった施設、高等農林や川崎工場などの文字も見えます。

- ※1 現在の市民公園の位置に、大正12年、岐阜高等農林学校設立。
- ※2 現市民公園前駅と羽場駅は昭和19年ごろ一時休止していた。
- ※3 各務原飛行場、名電各務原駅は、昭和40年にそれぞれ「かがみはら」から「かがみがはら」へ呼称変更された。また戦前には「名電各務ヶ原」の駅名表記がなされていたことが確認されている。
- ※4 昭和12年4月に当時開設していた各務原競馬場の開催日のみ停車する競馬場前駅が開設したが数年で廃止された。
- ※5 各務原線は、当初「東鷺沼」駅が、犬山線の新鷺沼駅東に設置され、昭和6年に両駅が統合され新鷺沼駅となった。



蘇原駅開設記念碑  
蘇原駅の西、JR三柿野路切の北東に建つ。蘇原駅開設をもとめる請願は、地元蘇原村だけでなく、軍、川崎航空機をはじめとした関連企業なども名を連ねた。



鉄道案内図・一部(昭和4年) 『鷺沼町百年史』より

### 各務ヶ原発博多港行き

各務ヶ原飛行場開設100周年の事業を進めるにあたり、飛行場の関連資料を探している中で、復員臨時列車一覧表（左写真・※1）が目につきました。昭和21年11月10日改正とある、この一覧表の中に、「各務ヶ原発博多港行き」12両の列車が1編成組まれていたからです。

復員列車は東京、上野、大阪などの都市部と、引揚船が入港していた港を結んだ列車が目につき、この一覧表では、早岐、南風崎（いずれも佐世保市）、博多港などが発着地となっています。大都市のターミナルが並ぶ中、「各務ヶ原駅発」の列車は異質に映ります。列車番号に添えられた※印は不定期列車とされていますが、各務ヶ原発博多港行列車の△の意味するところは史料中には見えません。

各務ヶ原飛行場では、航空教育隊・航空廠などの兵員が任を解かれ、部隊も解体されました。また終戦時、岐阜県下には数万人に及ぶ外国人労働者が在任しており、中国人捕虜・労務者が帰国する際の、一時収容所として航空隊兵舎

が使われていたともいいます（※2）。各務ヶ原発の復員列車は、こうした人々を運んだ列車なのかもしれません。

飛行場に付帯する軍施設や軍事工場の輸送に利用された鉄道は、戦後も輸送手段としてその役割はますます重要となっていました。軍の重要な拠点であった各務ヶ原飛行場へは、終戦から二ヶ月あまりのうちに、3000人を超える部隊が進駐してきます。こうした兵員輸送に鉄道も利用されました（※3）。那加駅・新那加駅には、国鉄・名鉄をつなぐ連絡線があり、すでに戦時中の軍事輸送でも頻りに利用されていました（※4）。

列車番号	発	着	時刻	車	着	時刻	記事
△八〇一三	品川	品川	二〇、〇四	早岐	早岐	九、三一	一二編
※八〇一九	東川	東川	二二、三二	博多港	博多港	九、五八	
※八〇〇三	品川	品川	一一、一五	大阪	大阪	三、四八	
※八〇一九	品川	品川	二二、三二	名古屋	名古屋	八、〇六	
△九〇一七	各務ヶ原	各務ヶ原	六、四六	博多港	博多港	八、〇八	
※八〇二二	名古屋	名古屋	一一、〇〇	博多港	博多港	一三、二五	
△八〇二一	大阪	大阪	二〇、二〇	早岐	早岐	二、二七	

復員臨時列車一覧表（※1）



昭和23年米軍撮影航空写真(国土地理院)に加筆  
国鉄と名鉄をつなぐ連絡線を経由し、多くの物資や兵員が運ばれていた

平成30年4月より「各務原市歴史民俗資料館」が、市中央図書館3Fへ移転します。資料館は平成20年4月より中山道鶴沼宿屋館に所在し、平成22年からは復元された鶴沼宿協本陣の管理も含め、中山道の宿場町において市内外から多くの方をお迎えしてきました。

移転を機会に、開館よりこれまでの歴史民俗資料館の歴史を振り返ります。

#### 昭和41年考古資料室、民俗資料室開設

前身となる資料室が蘇原支所内に開設しました。

#### 昭和51年 桜井家住宅が重要有形民俗文化財に

桜井家住宅に蘇原支所から民具類を移し「民俗資料館」として公開されました。

#### 昭和53年 開館

市保健文化会館（現在の産業文化センター所在地）に開館しました。

昭和43年から行われた炉畑遺跡（県史跡）の発掘調査で出土した貴重な遺物をはじめ、市内各所の資料を収蔵し、郷土の歴史文化に触れる場として活動してきました。

#### 平成3年 炉畑遺跡前に移転

保健文化会館の取り壊しに伴い、資料館は炉畑遺跡前の鶴沼三ツ池町へ移転しました。それまで資料館で収蔵・展示されていた炉畑遺跡出土遺物をはじめとした考古資料は、市中央図書館3階に開館した各務原市埋蔵文化財調査センターへ移されました。考古分野の資料管理等を埋蔵文化財調査センターが担うこととなり、歴史民俗資料館では、隣接する旧桜井家住宅の管理と公開や、歴史・民俗分野に特化した活動を行いました。

## 歴史民俗資料館が移転

平成30年4月から市中央図書館3Fへ



### 郷土を知る各種書籍の刊行

市制施行20周年を記念して刊行された各務原市史をはじめとして、市内に残る貴重な史料や、特色ある農村舞台など様々な分野の研究成果をまとめた資料調査報告書を刊行してきました。また戦後50周年を記念して編纂された戦時記録等の三部作、かみ野の風土なども刊行しています。

- 平成13年 中世山城サミット
- 平成15年 市中央図書館へ移転
- 平成18年 川島会館へ移転
- 平成20年 鶴沼宿町屋館へ移転 ①
- 平成23年 木曾川文化史料館開館
- 平成25年 「懐かしの昭和」展
- 平成26年 「護命僧正と古代山田寺」展
- 平成27年 「戦後70年 明日の各務原へ」展 ④
- 平成28年 各務原台地シンポジウム ⑤
- 平成29年 「各務ヶ原飛行場 100年の歩み」展

所蔵資料や研究成果を活用した企画展を市内各所で開催しています。市川百十郎など郷土の輩出した先人の足跡や、養蚕や川島地区での生業などをとりあげたほか、各務原台地シンポジウムや見学ツアーなど、自然・風土も含めた「ふるさとの再発見」につながる事業を展開しています。

#### 各務原市歴史民俗資料館

各務原市那加門前町3-1-13 中央図書館3階  
TEL 058-1383-11361 (4月1日)

明治24年

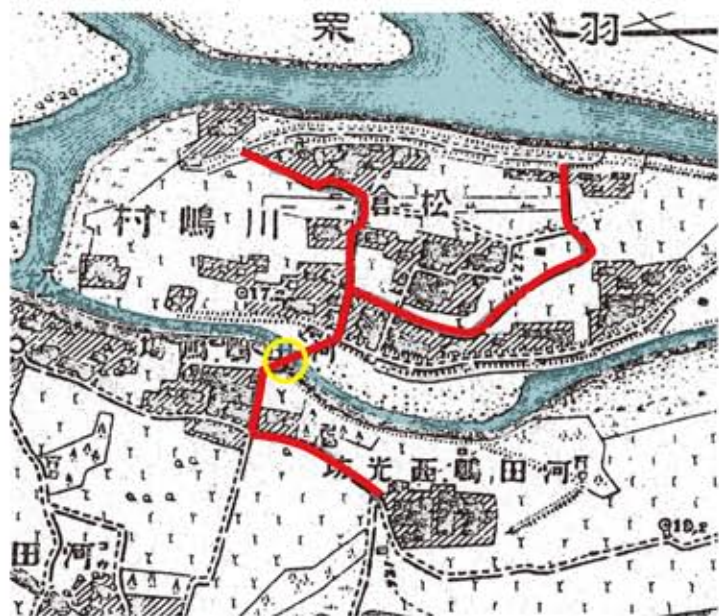


図1 河田西光坊からは、松倉集落との間に横たわる小派川を渡り(図中●地点)、渡船場のある堤防へは、松倉集落を迂回するように街道が通っている。

昭和2年

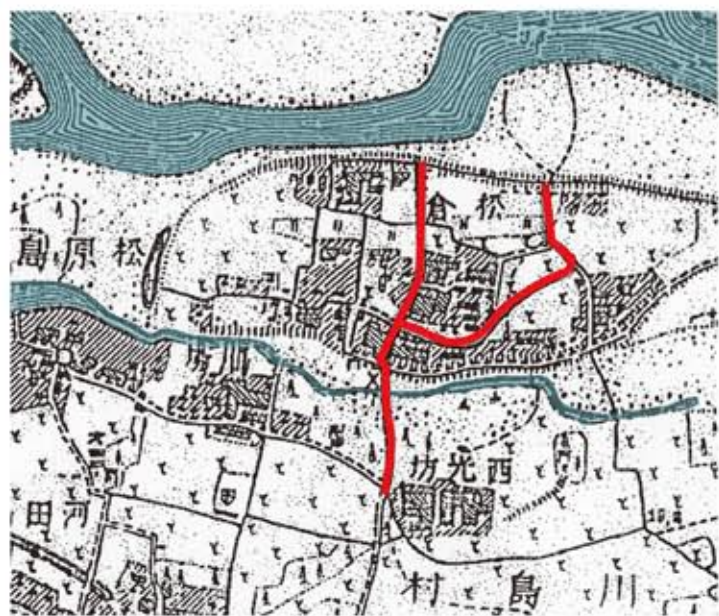


図2 河田西光坊と松倉間の小派川が細くなり、西光坊から最短の直線となる道ができるが細い道で、引き続き集落の東を回る道がよく利用されていた。

昭和30年

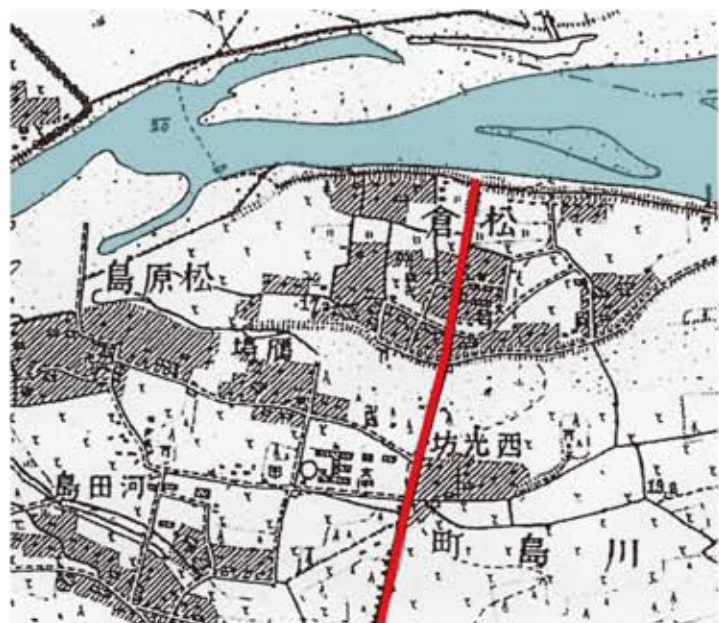


図3 川島地区内の小派川は埋め立てられ、集落は地続きとなった。メインルートとして、河田橋から松倉渡船場へと広く直線的な道が整備され、自動車輸送が盛んとなった。

一・二 渡船場間をつなぐ街道  
牛子(松倉)渡船場と河田渡船場をつなぐ旧街道は、県道一宮各務原線として、真つ直ぐな南北の直線道路に生まれ変わっていますが、かつての街道は細く曲がりくねった道でした。明治から昭和にかけての地図を比較すると、街道の道筋が変化していることが分かります。(図1〜3)

時々の川の流れによって、渡河地点も変わり、それをつなぐ道筋も変化していったと考えられます。大正12年(1923)から昭和4年(1929)にかけて行われた木曾川上流改修工事では、川島地域への洪水被害を抑える堤防整備と、それによる流路の固定がなされています。その結果木曾川は、現在見られるような本流・北派川・南派川の三本にまとめられました。

たことにより、交通路の整備が大いに後押しされました。道は村落(島)どうしの連絡のみならず、これを直結し一宮方面とつなぐ流通路として整備されていきます。昭和に至り、毛織物業が主要産業となると、川島地域は愛知県側の尾西・一宮の毛織物工業圏の一角を成すようになりました。自動車輸送の普及は、それまでの街道を曲がりくねった土の道から、より真つ直ぐな舗装道路へと変えていきました。



写真1 笠田渡船での通学(昭和37年)



写真2 小網橋竣工の渡橋式(昭和27年)

## 川島の渡船場と昔の街道

川島歴史さんぽ

川島地域は木曾川の中洲に位置し、木曾川の流路が幾筋にも分かれ、村々を隔てていました。他村との往来は渡船が唯一の交通機関で、生活に欠くことのできないものでした。今年度の木曾川文化史料館の講座「川島地域の交通の発達」をテーマに、渡船場と昔の街道をとりあげました。

### 一 生活を支えた渡船

川島地区には、6か所に渡船場跡の碑・案内板がありますが、出水のたびに流れを変える川筋であったため、渡船場も移動したり、途中でなくなってしまうものもあります。

#### ◆河田渡船場跡

河田渡しは河田島村と対岸の尾張河田村(現一宮市)を行き来する渡船で、美濃と尾張を結ぶ重要な交通路でした。享保12年(1727)に、一宮に三八市が開かれると、美濃方面からの行き来が盛んになり、馬の利用が多かったことから「馬道渡し」とも呼ばれていました。

#### ◆松倉(牛子)渡し

旧牛子村にちなみ「牛子渡し」とも呼ばれた渡しで、天正14年(1586)の大洪水で、木曾川本流が美濃との間を隔てるようになったため開かれたのが最初とされています。渡船場近くには、かつて木曾川の舟運で栄えた松倉の川港に設置された永代常夜燈も残っています。

旅人や商人などが行き交う交通路として賑わう渡しがある一方で、各村が自作のために自ら開設していた「作渡船・自分渡」などと呼ばれる渡船もありました。川の中洲で田畑が少なく、大野村(現一宮市浅井町)や米野村(現笠松町)、上中屋村(各務原市)などの木曾川を挟んだ隣村の耕地へ出かけるための渡船です。大野村からも「河田島の山林に薪物を集めにくいため渡船を開設したい」という陳情書が出されるなど、「作渡船・自分渡」は、木曾川兩岸の人々の生活に直結するものでした。

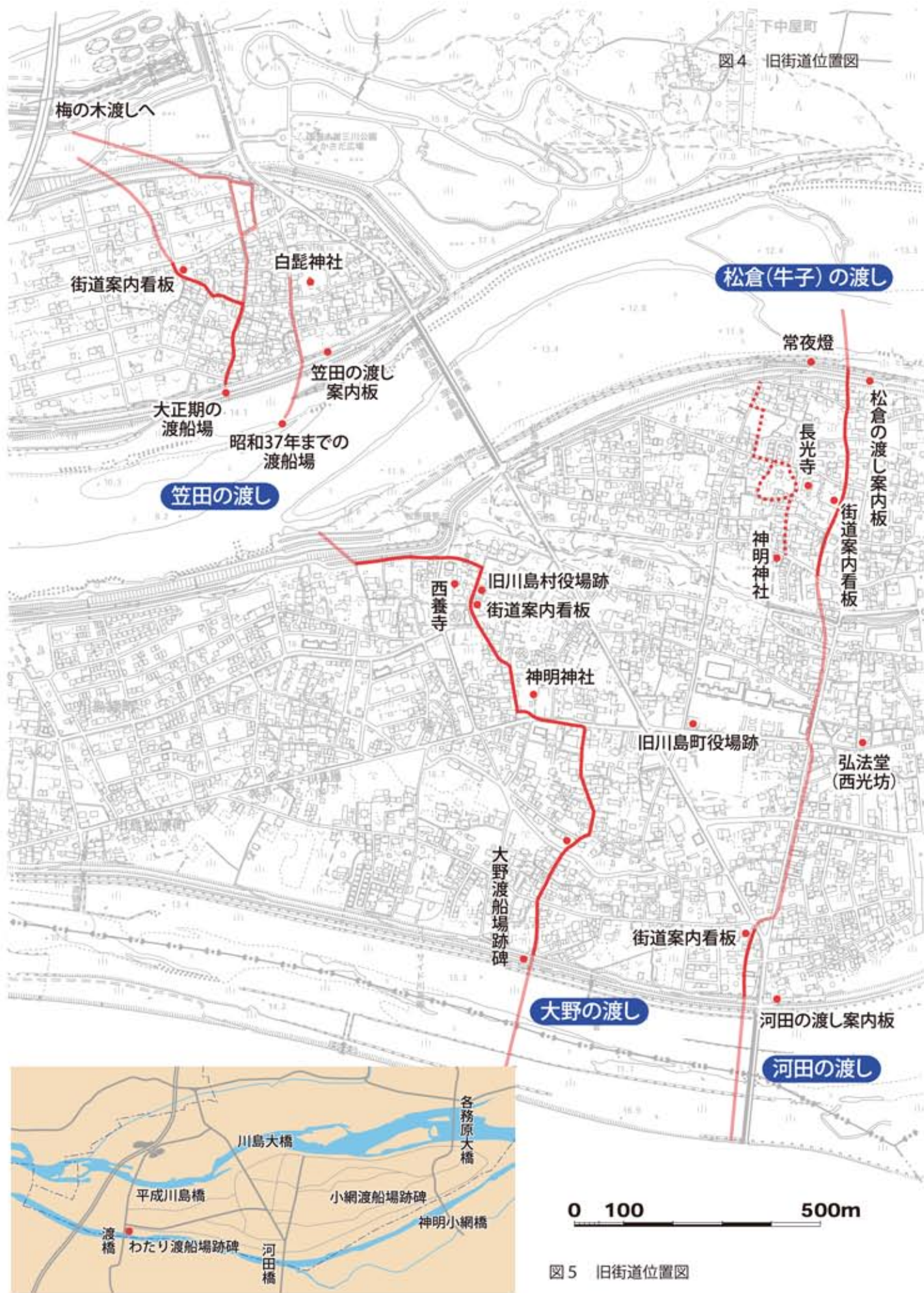


図4 旧街道位置図

図5 旧街道位置図



写真3 渡銭掲示板 木曾川文化史料館蔵



**川島歴史さんぽ**  
 第1回(座学)10月19日(木) 木曾川文化史料館  
 第2回(現地)10月26日(木) 松原・河田地区  
 座学で学習したことを元に、実際に現地を訪れ、笠田の渡しから大野渡船場へ続く昔の街道をたどりました。

かつて川島町ふるさと史料館(現木曾川文化史料館)で聞き取り調査を行った記録によれば、昔の街道の案内板で示された旧街道の他にも、地元の人々が行き交う道が存在していました。長光寺の裏手には、木曾川の水位が上昇すると、水が差し込んでくる池があったと言われ、この池をめぐる古道があったとされます。(左ページ地図中、点線)  
 地元で伝わる民話にも、松倉が小江戸と呼ばれ、料理屋や風呂屋が軒を連ね、町人の憩いの場となっていたという話がのこされています。

### 三. 近代化のもとで揺らぐ渡船

明治維新以降の交通網の整備の中で、渡船の営業が県知事の許可制となり、大正9年(1920)の道路法施行からは、渡船場に設置者や渡銭などを明記した渡銭掲示板を掲げるよう規定されました。木曾川文化史料館には大正7年(1918)の松倉・下中屋間(松倉渡し)の渡銭掲示板が残されています。(写真3)この渡船は、明治42年(1909)に、松倉で保有していた渡船の運行権を下中屋が譲り受けて開業したのですが、両村の契約で松倉の住民は、従来ノ習慣通り、往復一人金五厘と定められていました。大正7年の掲示板では、渡銭は一人金五厘とされており、明治42年に取り決めた渡銭の、往復6倍の料金が、一般利用者と同様、松倉住民にも課せられることになっていました。松倉からは、両村間の取り決めの通りに戻すよう陳情書が出されていますが、それはかなわなかったようです。「作渡船・自分渡」と称して、生産・日常生活と密接に関係し、渡船賃も取らなかったという時代から、他地域ともつながる大きな交通路・流通路の一角として渡船が位置付けられるようになっていきました。

一方で、大正期から本格的な河川整備が進むにつれ、河道の整理が進み、架橋技術の進展や大量輸送の需要もあいつまって、長らく続いた渡船が橋へと取って代わり、ほとんど廃止されていきました。  
**四. 渡船から橋梁へ**  
 川島地区における橋梁の整備は、まず南派川によって隔てられた愛知県側ですめられていきます。大正10年ころから南派川の改修がはじまり、流量が減少したこと、明治以降、一宮方面とのつながりが強い織物・然糸業が主要な産業となっていたことが関係しています。本格的な架橋に先立ち、小網(神明)の渡しや河田の渡しの位置に、木製の橋が架橋されます。大正11年(1922)の河田橋(木桁橋)の架橋から、翌年には川島村を起点とする「浅井那加停車場線」が県道に認定され、交通量が増加していきます。昭和6年(1931)には、河田橋が架け替えられ、河田橋北詰にタクシ―営業所もできました。昭和13年(1938)には松倉・東一宮間を結ぶ愛北バスが川島地域初の定期バスとして運行を開始しました。  
 しかしこれらの橋も、出水時には流出し、再び渡船を利用することを繰り返す、三代目となる現在の河田橋が完成したのは昭和

**五. 渡船の終焉**  
 南派川の整備による水量低下もあって、愛知県側において順次橋梁の整備が進む中、岐阜県側では、昭和31年に出された陳情書に、当時の状況と架橋の促進を求める願いを見ることができます。  
 「愛知県一宮市と川島村間の南派川に永久橋が架設せられることになり、愛知県とは極めて密接に結ばれますが、岐阜県でありながら岐阜県とは僅かに渡船による不便な交通のみで、車両は総て一旦愛知県に入り、笠松の木曾川橋を経て岐阜方面へ交通する状態」  
 川島大橋架橋についての陳情(昭和 31年) こうした架設促進運動が後押しし、川島大橋は昭和37年(1962)に完成しました。一方、松倉および笠田の渡船は川島大橋完成により廃止となり、川島の渡船は全て姿を消しました。(佐藤浩子)

## 平成29年度の歩み

### 各務ヶ原飛行場開設100周年記念事業

テーマ	2017年に「各務ヶ原飛行場」が開設より100年を迎えたことを記念し、各務原市の近現代史において重要な役割を果たした飛行場の姿を、様々な事業を通じて市民に伝える。
パネル展	会期 平成29年11月18日(日)～12月10日(日) 会場 市中央図書館3F 展示室A 内容 大正期から戦後までの飛行場の歴史を語る写真や、「三式戦闘機<飛燕>」のプロペラスピナーなどの展示 来場者 1,500名以上
アンコール展示	会期 平成30年3月2日(金)～8日(木) 会場 市産業文化センター1F 21プラザ
記念講演会	1 「各務ヶ原と四式重爆飛龍 ～各務ヶ原の生産を支える為に作られた地下工場群～」 全日本軍装研究会代表 辻田文雄氏 平成29年11月5日(日)開催 参加者80人 2 「各務原の空を飛んだ飛行機たち」 かかみがはら航空宇宙科学博物館支援ボランティア 小山澄人氏 平成29年11月25日(土)開催 参加者70人
岐阜基地探訪ツアー	開催日 平成29年12月2日(土) ①午前の部 小・中学生と保護者 25名参加 ②午後の部 一般 30名参加 内容 自衛隊岐阜基地内に残る、戦前の建物や記念碑を見学



左上/100周年記念講演会 左下/「昔の暮らしを体験しよう」講座  
右上/古文書講座 右下/「消しゴムはんこ」講座

### 学校見学・出張講座・職場体験

	開催日	学校 / 講師		
1	4月14日(金)	鷺沼第一小学校6年	炉煙遺跡、鷺沼宿	93人
2	4月25日(火)	陵南小学校6年	坊の塚古墳、衣裳塚古墳	65人
3	4月25日(火)	陵南小学校1年	炉煙遺跡	67人
4	4月26日(火)	鷺沼第二小学校6年	坊の塚古墳、衣裳塚古墳	97人
5	4月26日(火)	鷺沼西保育所	炉煙遺跡	42人
6	5月12日(金)	稲羽東小学校6年	炉煙遺跡、大牧1号古墳	38人
7	6月1日(木)	芥見小学校6年	炉煙遺跡	68人
8	6月29日(木)	陵南小学校6年	大牧1号古墳	65人
9	6月30日(金)	鷺沼第三小学校3年	出張講座	75人
10	9月7日(木)	川島小学校4年	木曾川文化史料館	122人
11	10月11日(水)	旭ヶ丘小学校5年	炉煙遺跡	55人
12	10月13日(金)	田原小学校5年	炉煙遺跡	58人
13	10月18日(水)	生津小学校6年	炉煙遺跡	61人
14	10月18日(水)	上之保小学校5年	炉煙遺跡	8人
15	10月20日(土)	生津小学校5年	炉煙遺跡	68人
16	10月24日(火)	中央中学校2年	職場体験	4人
17	10月25日(水)	中央中学校2年	職場体験	4人
18	10月27日(金)	蘇原第一小学校6年	出張講座	147人
19	10月27日(金)	茜部小学校6年	炉煙遺跡	47人
20	10月27日(金)	響学校小学部4年	炉煙遺跡	2人
21	10月31日(火)	川島中学校1年	炉煙遺跡、大牧1号古墳	95人
22	11月1日(水)	鷺沼第三小学校3年	鷺沼宿	75人
23	11月10日(金)	鷺沼第三小学校3年	鷺沼宿	75人
24	11月10日(金)	鷺沼第一小学校6年	臨本陣	100人
25	1月24日(水)	鷺沼第三小学校3年	鷺沼宿	76人
26	2月7日(木)	鷺沼第三小学校3年	鷺沼宿	76人



▲パネル展

### 講座事業

1	親子で学ぶ「消しゴムはんこ」講座 第1回 平成29年6月13日(土)開催 参加者13人 第2回 平成29年6月24日(土)開催 参加者10人
2	親子で学ぶ「昔の暮らしを体験しよう」講座 平成29年7月26日(水)開催 参加者20人
3	川島歴史さんぽ「川島地区の渡船場と昔の街道」 第1回 平成29年10月19日(木)開催 座学 参加者11人 第2回 平成29年10月26日(木)開催 見学 参加者12人 笠田の渡しから大野渡船場へ続く昔の街道を中心に、近代交通の発達に注目しながら、松原・河田地区に残る史跡を訪ねる
4	野外セミナー「中山道の宿場町御嵩宿と願興寺の歴史を訪ねる」 平成30年3月2日(金)開催 参加者25人 鷺沼宿～願興寺～中山道みたけ館～商家竹家～鷺沼宿
5	古文書講座「郷土の古文書から読む歴史」 参加者15人 開催日 6月13日(火)、7月11日(火)、8月8日(火)、9月12日(火) 10月17日(火)、11月14日(火)、12月12日(火)、1月16日(火)

### 刊行物

	刊行書籍名
1	各務原市資料調査報告書43号「各務ヶ原飛行場100年史」
2	各務原市資料調査報告書44号「旧中山道鷺沼宿本陣桜井家文書目録」
3	『資料館だより』第36号